〝エコーする〈知〉〟CPCリブレ発刊のことば

私たちはまさしく激動の二十一世紀を生きています。前世紀を戦争と平和な時代と位置づければ、今世紀は共生の時代です。私たちは人類全体が平和を享受、共有し、未来に向かって希望の持てる世紀が実現できるよう、世界の人びとと手をつないで努力していかなければなりません。相変わらず世界のところどころでは戦争や紛争が起きています。これらは平和を維持していくことがいかに難しいかの証左に他なりませんが、私たちはそれでもなお、こうした現実を直視しこれらを乗り越えていかなければなりません。

経済のグローバル化、社会システムの制度疲労、政治の機能低下などにより、貧富の格差が世界のあちこちで広がり始め、また、情報通信手段や科学技術の急激な発展によって、私たちの生活は驚くほど変化し、今日の世界は人間を脇役に回して、経済効率と利便性の追求に日々翻弄されている様相を呈しています。このような地球社会に身をおく私たちにとって、今こそ真の幸福の意味を考えることが求められています。

出版で何ができるかを今日的に問うてみたとき、ややもすると、出版もその一端を担っている情報の洪水に私たちは押し流され、自分たちの存在すら見失いかねない状況にあることも事実です。だからこそここで、出版のありかたをラディカルに問い、私たちが〈知〉のゆらぎに抗してしっかりと足を地につけていくことが未来を生きぬいていける、あえて言えば、生きるヒントを得ようとするものです。

このような状況をふまえ、私たちは確かな知識と知恵とが交差しながら響き渡る、という思いをこめて〝エコーする〈知〉〟、CPCリブレを発刊します。

読者の皆様が、勉強会、学習会などで本書をご活用されるよう、期待してやみません。

二〇一三年　二月

特集

「人文書」の復興を！

「人文書」とは何だろうか？
それ自体が実は難問なのだが、
今はさしあたり、文学・哲学・歴史・社会科学などに
分類される書物をイメージしてみよう。
「出版不況」と言われて久しいが、
そうした本は特に不況の影響を強く受けているという。
この「危機」ともいえる状況下で、
「人文書」はどのようなかたちで生き残ることができるのだろうか。

論座 2007.3月号

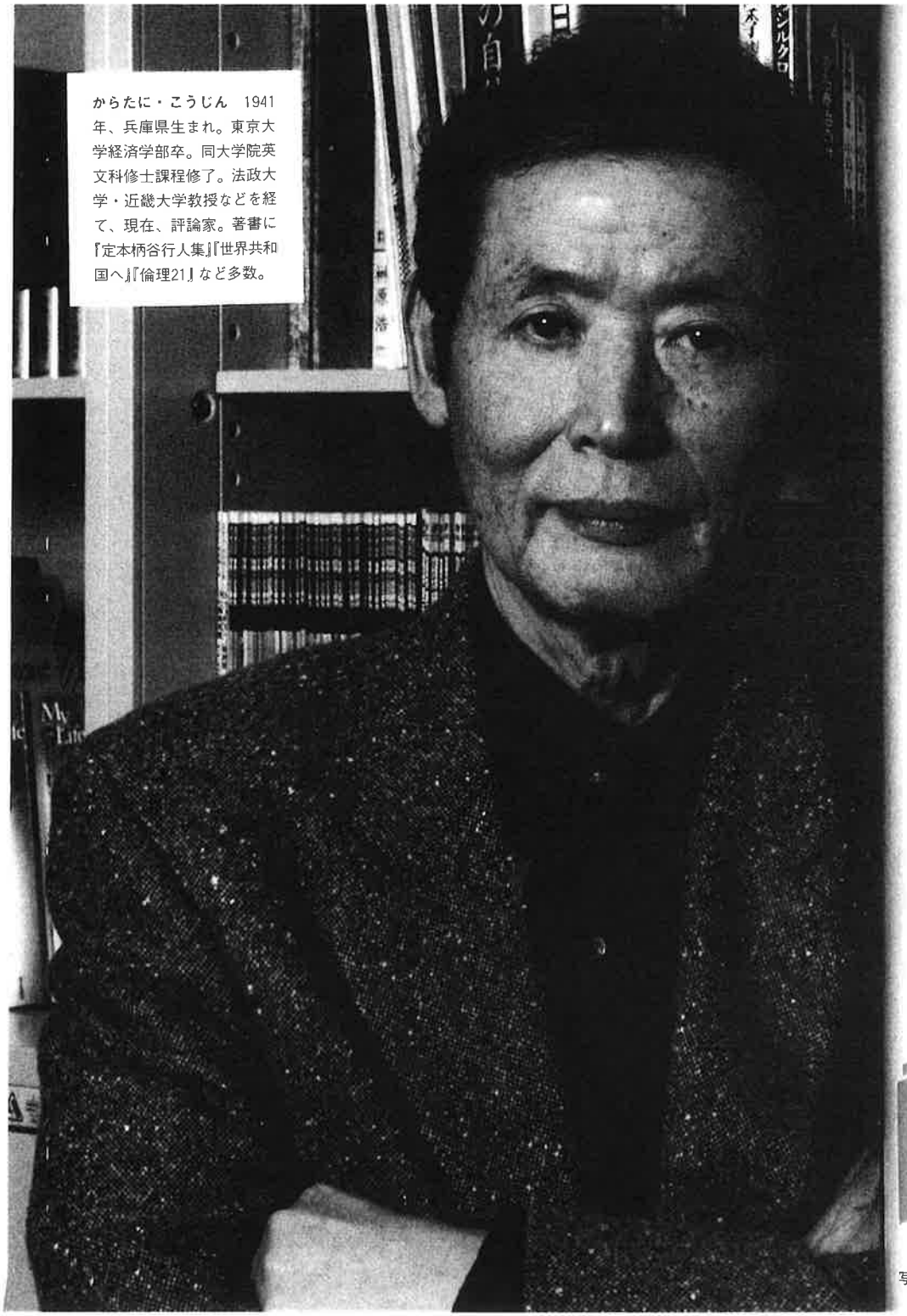
写真／ジュンク堂書店新宿店　撮影＝横関一浩

可能なる人文学

――逆転を待ちながら

評論家

柄谷行人



からたに・こうじん　1941年、兵庫県生まれ。東京大学経済学部卒。同大学院英文科修士課程修了。法政大学・近畿大学教授などを経て、現在、評論家。著書に『定本柄谷行人集』『世界共和国へ』『倫理21』など多数。

写真＝松永卓也

「人文書」の復興を！

「人文書の危機」というのは、具体的には、人文書が売れないということでしょう。人文書というと、文学・哲学・歴史・社会科学などの書物だといっていいわけですが、それが売れないことは、人文書の出版社にとっては確かに危機でしょうが、ここで二つ疑問があるのです。

一つは、現在人文書が売れないことが確かだとしても、過去と比べてどうなのかということです。もう一つは、人文書が売れないことが、社会にとって、人間にとって危機なのだろうか、ということです。

最初のことでいうと、かつて人文書が異常に売れた時代がありました。それは第一に、1920年代（大正から昭和にかけて）「円本」が出てきた時代、次に1960年代以後だと思います。円本というのは、世界・日本の文学や思想の本が、一冊1円で買えるという意味です。さらに、そのころ、岩波文庫も出た。明治・大正時代には、知識階級は少数でした。外国の本といえば、その人たちは原書あるいは英訳本を読んでいたわけですが、円本以後は、それを翻訳で読む人たち、知的大衆というか、大衆的知識人が出てきたのです。これは日本における、消費社会＝大衆社会化の最初の表れだといっていいと思います。

つぎに、60年代は、経済の高度成長があった時代です。実際、大学への進学率が急激に上がった。大学紛争はその結果として起こったようなものです。つまり、急に増えた大学生が人文書を読んだ。さらに、家で「文学全集」などをそろって買うケースが少なくなかった。この時期が人文書の最盛期ではないか、と思います。その余韻が80年代、バブルのころまで続いた。たとえば、よくわからぬままに雑誌『現代思想』を読む人たちが多かった。

こういう時期と比べて、今、人文書が売れない、というのはおかしいと思います。その時期は、それまで本を読まなかった層が急激に本を読んだわけで、それ以前は、本を読む人はさほど多くなかった。戦後に、たしか太宰治が、2万部以上小説が売れるのは異常だというようなことを書いていたのを覚えています。60年代までは、人文書はさほど売れていないし、出版社も少なく、また規模も小さかった。現在、人文書が売れないといっても、量からいえば、昔より多いでしょう。

知識人を批判する知識人

人文書が売れた時代がよかったかというと、僕はそう思わない。それは大量の知識人＝大衆が出現したということです。廣松渉は60年代、全共闘の時代によく読まれた哲学者ですが、僕に、あの連中は語学ができないので困ると、こぼしていたことがあります。外国語とか、基礎的な勉強をしない。そんなものを飛び越えて、すぐに大問題に向かう。しかし、それは大体、不毛な結果に終わっています。

だから、人文書が売れるということが、このような速成知識人を増やすことだとすると、それは別に喜ばしいことではない。それはむしろ、知識人あるいは知識を簡単に否定するということに帰結すると思います。「知識人を批判する知識人」が一般化する。そして、彼らはまもなく、実際にも本を読まなくなる。近年に人文書が売れないというのは、そういうことの結果だと思います。

それなら、速成知識人はよくないのか、というと、必ずしもそうではない。かつて知識人が一種の支配階級として存在した時期があったのです。知識人と大衆との間に大きな開きがあった。その場合、知識人はノブレス・オブリージのような義務感をもっていました。それは今の知識人にはないものです。エリート意識という言葉が今でもありますが、東大に入ったぐらいでエリートというのはおこがましい。左翼にならないようなエリートなんてありえないのです。

しかし、こういうエリート知識人の存在は、明らかに階級社会にもとづいています。だから、知識人がかつてそのようなものであったといっても、それをとりもどすべきだというのはおかしい。古いタイプの知識人が存在する社会的基盤がなくなったのは、悪いことではないのです。

そのような基盤は、たとえば、インドではまだ濃厚にありますよ。日本にはほとんど知られていないけど、インドの知識人の大半は左翼だし、共産党幹部などはほとんどバラモン出身のマルクス主義者です。といっても、そういう状態をもたらすような社会構造が望ましいとは、いえない。社会構造が変われば、インドの知識人も変わってくるだろうと思います。実際、最近は、そのような変化が起こっているように見えます。

日本では、1960年以後、知識人と大衆という区別が意味をもつような社会的階級構造が徐々に消えていったと思います。社会の中からあらゆる差異が相対的に消えつつあります。「階級」がそうだし、「男／女」も、「差別」もそうです。もちろん、完全になくなったわけではないのですが、そういう差別の否定がある程度実現されてしまうと、その差異が生みだしている力そのものが消えてしまうのです。

大きな差異がない時に、その差異を解消しようとするエネルギー――ときにはそれが「革命」となります――がないのは当たり前で、学問的な情熱も薄れているように思います。ただこれは世界的な傾向で、別に何も日本の特徴ではありません。ただ、日本ではそれが極端に出てきたのだと思います。

たとえば、アメリカは大衆社会の現象が最も早く出てきたところですが、実は、知識人の階級が執拗に残っています。たとえば、アイヴィー・リーグと呼ばれる、東部の名門大学などは、本当に「象牙の塔」ですね。それは、社会的・政治的な動向と関係なく、持続しているのです。日本にはそのような「象牙の塔」などなかった。逆に、「象牙の塔」への批判、自己批判だけがあって、大学はたえず、社会的・政治的動向に屈従してきたのです。

今も同じです。近年の日本の大学改革

は、「アメリカ化」と見られていますが、それはたんに表面的な類似にすぎない。その辺の誤解と錯覚が、今後に命取りになるかもしれません。アメリカの大学は、絶対に政府のいいなりにはなりません。マッカーシズムの時代でもそうだったし、9・11以後もそうです。しかるに、日本の国立大学は独立行政法人化とともに、文部官僚のいいなりになっている。つまり、むしろ国営化されたのです。

世の中の動向に敏感すぎることの危険

『中央公論』や『世界』のような戦前や戦争直後からある雑誌は、知識人と大衆を橋渡しするものでした。それは先ほどいった、知的大衆あるいは大衆的知識人の雑誌です。僕は、こういう中間的な知的雑誌がこれほど広がった国をほかに知りません。普通は、知的なものと一般的・大衆的なものは分離しています。そういうものが共存し交差するような「総合雑誌」のようなものはない。

新聞についても同じです。朝日や読売のように部数が大きく、かつあらゆる知的階層に向けられたような新聞が、他の国にあるだろうか、と思います。韓国にはあるでしょうが、そもそも日本の影響を受けています。ニューヨーク・タイムズなどは、部数は100万部程度ではないでしょうか。一般の人が読むような新聞ではありません。そのわりには、影響力がありますが。

かつて『朝日ジャーナル』という週刊の雑誌がありました。1984年だったか、ジャック・デリダが来日したときに、そこで僕と浅田彰の3人で鼎談したのですが、その時にデリダは、「こんな高いレベルの議論を載せた雑誌が20万部も売れるというのはすごい」と、驚いていました。そのとき僕は「1週間で消費されて、それで終わりです」と言ったのですが、そうはいっても、確かに、こんな国はほかにないでしょうね。

つい先日、僕は朝日新聞で、デヴィッド・グレーバーの『アナーキスト人類学のための断章』(高祖岩三郎訳、以文社)を書評したのですが、グレーバーはそれを知って、「日本はすごい」と言った。巨大部数の新聞で自分の本が書評されること自体が驚くべきだ、ということらしいです。実際、アメリカでは、そんなことはありえません。たとえばニューヨーク・タイムズの書評なんて実にひどいものです。三流の評者が書いているのです。知的なものは排除されている。デリダやエドワード・サイードの本が書評されることはけっしてない。

ところが、日本の大新聞にはそういうものが載る。朝日新聞だから載るのではない。読売でも毎日でも載ります。だから、これは「すごい」というほかない。グレーバーが勘違いするのもむりはないのです。ところが、たとえばアメリカでは、彼がかかわっているような社会運動や政治運動が、新聞やテレビに報道されないけれども、大きな規模で存在します。アメリカや、隣の韓国をふくめた多くの国で、イラク戦争反対の大きなデモがありましたが、日本にはほとんどなかった。それなのに、巨大な部数を誇る新聞にアナーキスト活動家の本の書評が出る。これはいったい何だろう(笑い)、と僕自身が考えてしまう。

ある意味で、これは面白いことです。それは僕自身にとっては、よい影響を与えていると思います。というのは、日本の環境では、専門的な学者・知識人相手ではなく、一般の読者に向かって書かなければならないわけですが、そのような要請があることで、書き手の姿勢が変わってくるからです。たとえば、僕はアメリカの学者の書き方が嫌いです。あんな書き方では、数少ない同業者以外に、誰が読むのかと思います。

その点、日本の環境では、つねに一般の読者を念頭におく必要があります。ただ、逆に、そのために、社会的動向に敏感に反応して変わってしまうということがある。それは、先に、日本には「象牙の塔」が存在しないといったことと、同じです。それは、世の中で売れなくても知られなくても、断固としてやりつづける人がいない、また、そのような人を支える組織がない、ということを意味するのです。だから、世の中の動向に敏感すぎることは危険でもあるわけです。

「観念と物」の世界から「情報」の世界へ

かつて新カント派のリッケルトが、人文科学と自然科学を区別しました。そういう通念がずっとあると思います。しかし、それに対する反対もずっとあるのです。その中で、代表的なものは情報理論にもとづくものだと思います。

僕は昔、学生のころ、ノーバート・ウィーナーの『サイバネティックス』(池原止戈夫他訳、岩波書店)という本を読んだことがあります。彼は、今までの哲学は観念と物質の対立の中で考えてきたが、情報という概念は両者の対立を超えるものだという。そして、情報とは差異である、と。たとえば、カエルは目の前の「虫」を見ているのではないのです。

では何を見るのかというと、虫が動くことを見る、つまり、それが動いたという変化、すなわち差異を見る。いいかえると、虫がじっとしていれば、つまり差異がなければ、カエルにとって虫という対象は存在しないのです。そして、差異＝情報は、観念でも対象でもない形式です。

人間についても同じことがいえるわけですね。何か差異がある、変化があるときに、対象が存在する。なのに、それを観念とか実在とかいっているのはおかしい。それは、情報＝差異＝形式を「物象化」する見方にすぎない、というようなことになります。たとえば、レヴィ＝ストロースの構造主義は、それまで人文科学的な対象であったものを、二項対立の束からなる構造としてとらえた。別の観点からいうと、それは、人文学と自然科学という旧来の区別を、情報＝差異＝形式という観点から否定するものです。

情報＝差異＝形式というような問題を、哲学的な議論としてやっていた時期があります。それがいわゆる「現代思想」です。しかし、そのことが新鮮に見えたのは、コンピューターが普及する前の議論だったからですね。たとえば、デリダは1970年代にハイパー・テクストのようなことを考えた。それは斬新な実験でしたが、今や当たり前です。コンピューターの発展とともに、観念も物質もデジタルな「情報」に還元できるというようなことが、現実化してきました。だから、「現代思想」も終わってしまった。今や、そういう「人文書」は読まれず、脳科学者の書いたものが読まれています。僕は嫌いですが。（笑い）

考えてみると、ハイデガーが昔、サイバネティックスの後で哲学はいかに可能かという問いを発した。その問いは先駆的なものだったと思います。それは、現在でいえば、コンピューターのあとに、人文学はいかに可能かというような問いです。あるいは、情報に還元されてしまわないような知がいかに可能か、ということです。まず、それは不可能だというべきです。下手に人文学の価値を唱えるのは無駄だし、また、まちがっていると思います。ただ、その上でなお、いかに可能かを問うことができる。

もちろん、このような問題は、コンピューターやテクノロジーだけの問題ではありません。基本的に、資本主義の問題です。商人は安く買ってきたものを高く売って、その差額を利潤とする。産業資本主義も、そのように「差異」から利潤を得ることで増殖するという原理にもとづいています。ただ、その結果として、次第に差異が無くなってしまう。利潤率が低下する。だから、資本主義はつねに差異化し、新たな差異を見つけ出そうとする。先進国でそれが飽和状態になれば、その外に、途上国に、差異を見出す。おおざっぱにいえば、それがグローバリゼーションの過程ですね。

その結果、世界中で、差異が消滅しています。むろん違いはありますが、実際は、同じような生活をしているのです。だからこそ、宗教とか伝統文化などをもってきて、それに抵抗するわけですね。

しかし、よく見ると同じことをどこでもやっている。どこの国でも、『ハリー・ポッター』を読んでいる（笑い）。差異があっても、たちまち消費されてしまいます。この速度はものすごい。だから、すぐに消費されてしまうような差異で騒いでいてもしようがないと思います。

差異の無化と文化の死

僕は『近代文学の終り』（インスクリプト）という本を出しましたが、別に僕は声を大にして「終わった」と触れて回りたかったわけではない。また、そのようにいうことで、文学者を叱咤激励しようとしたのでもない。文学はどうかと聞かれたから、「もう終わった」と言っただけです。俺は知らん、君らは勝手にしてくれ、ということです。

でもこの本を出したら、他のジャンルの人たちから、異口同音に「それは文学だけじゃない」といわれました。美術は終わっている、建築は終わっている、演劇は終わっている、映画は終わっている、というのです。それから、「ロックはだいぶ前に終わっています」なんて言われた。（笑い）

これまで、「……は終わった」というのは、何かが新しく始まるということを意味していたのです。ところが、現在、「終わった」というのは、何も新しいものがない。この先に同じような状態が続くだろうが、どうっていうことはない。そういうような「終わり」なのです。だから、終わったというとき、威勢よくではなく、ぼそぼそというほかない。

たとえば、ガヤトリ・スピヴァクが数年前に『ある学問の死』（上村忠男、鈴木聡訳、みすず書房）という本を書いています。「ある学問」とは、ヒューマニティーズ（人文学）、というよりむしろ、文学批評のことです。僕は、彼女と同じコロンビア大学比較文学科で長く教えてきましたから、彼女のいうことはよくわかります。たとえば、だいぶ前から文学の教師は学部の授業で、映画を見せています。映画が面白いからではなく、そうしないと学生が来ないからです。映画で興味を持たせないと、文学を読んでくれないのです。こうなっちゃあ、おしまいです。

こういう「終わり」は、突き詰めると、やはり「差異の消滅」ということにあると思います。差異とは、具体的にいえば、階級的差異、男女の差異、年齢（世代）の差異ですね。これが無くなると、パワーが無くなる。芸能や文学の栄光は、差別的な社会構造に基づいています。能や歌舞伎も元来はそうです。1960年代に、新劇に対して出てきたアングラ演劇は、いわば河原者に戻ることで、活力を取り返そうとした。たとえば、唐十郎が紅テントで演劇をはじめたわけです。

小説でいえば、中上健次ですね。彼は桁外れのすごい作家でした。それは、彼がたんに知的に現代文学の先端を行っていたからでなく、彼の力の根源に、巨大な差異、つまり、差別の問題があったからだと思うのです。しかし、この差異は80年代になって、急激に衰えた。それは一つには、差別がある程度、反差別闘争

によって解消されたからです。とはいえ、差別が軽減したのは、望ましいことですよ。文学のために、差別を望むなどというのは、本末転倒です。もし差別が真に無くなるのなら、文学など無くてもいい。

60年代アメリカでは、市民権運動、特に黒人差別に対する反対運動があった。しかし、それが一定の成果を得るとともに、黒人の文化的エネルギーは衰えていったのです。そこで、女性、さらに、ゲイ・レズビアンという所に中心が移っていったわけですが、それらも、一定の解放を獲得するとともに、衰微しています。もはや文化的な活力にはなりえない。それと同じようなことが、日本でもおこったわけですね。

いま、「格差社会」ということがさかんに言われていますが、これも、かつてのような差異にはなりえない。たんに相対的な貧しさにすぎない。昔の貧困者からみれば、ぜいたくなものです。一方、かつての貧困階層あるいは被差別階層のなかには、一種貧困の文化がありました。貧しいけれども、ある意味では豊かだった。その意味で、今の新貧困者は二重に貧しい。彼らは文化を生み出すようなパワーをもっていない。

「いじめ」の問題が最近再び論じられていますが、それは昔のような露骨な差別があった時代のそれと違います。今の「いじめ」はむしろ、差異がないところに差異を作り出そうとするものですね。だから、以前と同じように扱うことはできないのです。

弁証法――人間万事塞翁が馬

僕がこういうことをいうと、誤解されるかもしれないし、また、複雑で何をいいたいのかわからないようにみえるかもしれません。だから、ちょっと説明しておきます。簡単にいうと、それは「弁証法的」な観点なのです。弁証法というと、正・反・合、矛盾からの生成、といったようなことが考えられますけど、そういうことではないのです。ヘーゲル自身が、弁証法について理解するためには、諺を見ればよいといいました。たとえば「急がば回れ」。急ぐことと、遠回りすることは、矛盾する。だから、そんな考えは非合理だという人がいるかもしれない。しかし、現実、あるいは現実の知恵は、弁証法的なのだとヘーゲルはいうわけです。

「人間万事塞翁が馬」ということわざもそうですね。良いと見えたことは、悪いことの始まりであり、悪いと見えたことは良いことの始まりである。もちろん、事後的にそうであったとしても、現在から見た場合、悪い状態があれば必ず良くなるという保証はありません。しかし、大体、そう思っておいてまちがいはないでしょう。

だから、今どんどん悪くなっているように見えても、それはむしろ何か新しいものが生じるために必要な過程なのかもしれない。今の段階は、確かにひどい状態だとは思うし、もっとひどくなるかもしれないけど、絶望する必要はない。現状で高を括っているような連中は没落する。今後、そういう逆転があります。いわば、塞翁が馬。それが弁証法なのです。僕の話は、そのようなものとして聞いてほしいですね。

たとえば、80年代の日本人はバブルの時代、有頂天になって、アメリカに勝利したと考えた。アメリカの不動産を買いまくった。しかし、そのあと、すぐに没落したわけです。

また、90年にいわゆる社会主義国家が崩壊したとき、アメリカのイデオローグは資本主義の勝利、自由主義の勝利を唱え、そして、「歴史の終焉」を唱えた。しかし、それはあるいはアメリカの没落の始まりであり、また、資本主義の「終わり」の始まりだったのです。先ほど、差異を追求して、それがグローバリゼーションにいたったといいました。しかし、今進行している勢いのまま、中国やインドのような国で経済成長し、農民の人口が減っていけば、世界資本主義は終わりです。もっとも、その前に環境危機があって、大変なことになるでしょうが。いずれにせよ、そんなに遠い先の話ではありません。

オーバードクターに救済の必要なし

人文書が売れなくなると、どうすればよいのか。一番簡単なのは、国家の助成金に頼ることです。たとえば、アメリカでは作家を大学で教えさせるということで援助してきた。ドイツでは作家に奨学金を与えている。しかし、僕は、そういうことが素晴らしい、羨ましい、とは全然思いません。

日本ではどうしてきたか。たとえば、講談社では赤字の文芸雑誌（『群像』）をずっと出してきましたが、それは、漫画など他の部門での利潤を社内で「再分配」することで成り立ってきたわけです。こういうことがいつまでも続けられるとは思わないし、やめたほうがいいでしょう。しかし、そうすると、商業的に売れるもの以外の「文学」は出版されなくなり、多くの作家は生活できなくなる。

そうなると、国家的に助成金によって、文学を維持しようということになるでしょう。しかし、僕は、そういうのはいやですね。伝統芸能ならともかく、文学を助成金で維持して何になるのか。生活できなくても、おれは文学をやるぞ、という人がいれば、文学は残る。だから、ほうっておけ、と僕は思います。

最近は大学院生でオーバードクターが多いですが、どうしたらいいか。僕も知っている学生が多いから、相談されると困ります。むろん「人文」系の学生ですが。大学全体が減少している上に、特に「人文」系は少なくなっている。今後に、いくら学位を得ても、大学のポストがあるはずがないのです。といっても、一時的に救済しても、問題を先延ばしにするだけです。そもそも、こういう事態になったのは、助成金があったからです。

今の段階ではまだ、これは個々人の問題だ、運が悪い、能力がない、コネがないという次元で考えられていますけど、解決は構造的に無理なのです。であれば、自分たちでやるほかないのではないか。どうしても学問を続けたいというのであれば。韓国で、オーバードクターの人たちが、研究所＝学校を自分たちでつくってやっている例があります。

今の大学のシステムでは、学問はできません。根源的に考えようなんてことはできない。すぐに成果を出せといわれるからです。「人文」系にとっては、これは致命的です。実際は、理科系だって同じことですが。博士論文なども、早く書けてパスしやすいのは、細分化されたテーマを選ぶことです。そんなものはすぐに古くなる。その上、そもそも、そんなつまらないことを、大学院まで行ってやる必要があるのか、と思う。

本当に学問をやりたいなら、自分たちで、その形態を作り出せばいいのではないか。しかし、僕がそういっても、仕方がない。みながそう思うまでに、時間がかかる。さしあたりほうっておけばいいと思っています。救済の必要なし！　つまり、そのことで、何かが始まるような逆転を待っているのです。

入門書や要約は読むな

芸術や人文学はいま述べたような状態にあるわけですが、それをどうしたらいいのかと聞かれても、こうしたらいいというような対策を言う気は毛頭ありません。事態が悪化するならば、それでよし、と思います。しかし、僕は、どんなに衰退しても、必ず人文的な学問をやろうという人が出てくると確信しています。

そもそも人文学とは、過去のテクストを相手にする学問です。いわば、テクストと対話することです。それに対して、自然科学は今実験して確証できるかどうかに真理性がかかっている。だから、他の研究成果を参照することはあっても、過去との対話はしません。たとえば、物理学の教科書はニュートンについて数行触れるだけです。ニュートンを思想家としては読まない。ニュートンを思想家として読むと、人文学になるわけです。ついでにいうと、ニュートンを思想家として研究した人として、ケインズがいます。そのケインズもまた、通常、経済学の理論としてしか論じられないけれども、やはり思想家なのです。彼のテクストに向かうかぎりで、人文学的な対象になります。

人文書を読みたいという人がいたら、ひとつだけ、忠告したいことがあります。それは、古典的な文献を原典（翻訳でもよい）で読め、ということです。入門書やそれに関する著作を読むと、忘れてしまうけど、原典を読んでいると案外忘れないものです。読み直さなくても、生きている間に、理解が深まったりする。しかし、要約で読んでしまったら、そのような成長はありえない。

たとえば、マルクスに関して、マルクス主義入門とかその種の本を読むのはやめて、面倒であっても、よくわからなくても、『資本論』を読んでもらいたい。手っ取り早くものを知りたい人は、なんとなく入門書で済ましてしまうのですが、原典を読んでおくと、時間がたっても、わかってくることがあります。入門書などはすぐに忘れてしまいます。

聖書に関しても、論語に関しても同じです。文学でもそうですね。僕は『源氏物語』を与謝野晶子の現代語訳で読んだのですが、その話をしたら、ある人に「文芸批評家ともあろう者が原文で読まないとは何ごとか」と叱られました。それはその通りですが、翻訳であっても源氏物語を全巻読んだというのは、のちのちに役だっています。たとえば本居宣長を読んでも、源氏物語の全体が頭に入っているのとそうでないのは違う。源氏物語についての論文は全部忘れても、源氏物語は今でも、何となく頭の中で生きているのです。

古典を読むということに関していえば、岩波文庫がいいと思う。昔から僕は、問われると、いつもこういっていました。岩波書店から出る本は読まなくてもいいが、岩波文庫は読め、と（笑い）。今でも、僕の本を読むのなら、まず岩波文庫を読んでくださいと言いますね。たとえばカント、マルクスの主な著作はみな岩波文庫に入っていますし、それらを読まないなら、僕の本を読んでも、意味がわからないし、自分で考えるということができなくなる。

読者は《外国人》

僕が読者として想定しているのは、《外国人》ですね。実際、今は英語で本を書いているのですが、それだけではない。日本人であっても、僕は、若い人は《外国人》だと思っていますから（笑い）。たとえば、「憲法9条」と言えば日本人にはわかることが、英語で書くときはいろいろと説明を付けなければならないのと同じです。自分が当たり前だと考えていることが、《外国人》にとっては当たり前ではないのですから。若い人たちに対しても、外国人に対するのと同じ態度を取らなければなりません。こういう言葉は知っているだろうかとか、どう言えばわかりやすいだろうかというふうに考えることが、自分の思考を鍛えるものだと思います。

僕がいうのは、若い人に向けて語るということとは違います。実際に、若い人が読むかどうかわかりません。しかし、読めばわかると思っています。また、先ほどいったように、必ず人文学を志向する、というか、この世界を変えようとする志向をもった人が出てくると確信しているのです。